神津たけし後援会報

発行/神津たけし後援会
〒386-0014 上田市材木町1-1-13
TEL0268-22-0321
発行責任者/寺島義幸
討議資料

貧しさに苦しむ子どもたちを救いたい

アフリカ勤務 17 年
神津（こうづ）たけし　横顔紹介

昭和 52 年、羽田孜元総理の実弟・神津進の双子の次男として生まれる。
父　進は上田高校を卒業。慶応大学在学中の 20 歳の時に、母の叔父にあたる佐久市の神津俶祐氏の養子となる。

幼少の頃は、父の仕事のため鎌倉市で育つも、休みといえば父の故郷である信州、特に叔父の羽田孜さんの選挙区を走り回る信州大好き少年だった。

小学生の頃から、ユニセフの活動に目覚め、「貧困に苦しむアフリカの子どもたちを救いたい。」そのために将来は国連で働きたい。高校生になるとその思いはどんどん大きく膨らみ、その気持ちを抑えることが出来なくなった。
国連を受験する条件として常任理事国の言語が必修の為、高校二年の時に、遂に一大決心。米国の高校に留学することに。

そのまま大学も米国のオターバイン大学に進学。国際開発に必要な経営学を学ぶ。卒業後は日本に帰国し、国際協力機構の奨学金を得て国立政策研究大学院大学で修士号取得。国連開発計画本部のインターンとして国際開発の調査研究に打ち込む。

そんな学びの中で、ニューヨークの国連本部で実務と行政をつかさどるデスクワークよりも、貧困に苦しむアフリカの地で、現地の人たちと直接ふれあい、その中で少しでも地域の開発と生活の向上のために働くことが出来たらとの強い思いから、国際協力機構・ジャイカに勤めることに。

国際協力機構・ジャイカでは、企画調査員・専門家としてケニア・チュニジア・コートジボアール・南アフリカ・ルワンダと、五か国の途上国に駐在。
日本では想像もつかない辛い環境にもけっして屈することなく、それぞれの地域で、電力・道路・橋梁等の建設と貧困の撲滅に奮走する。

アフリカ駐在中には、たまたま青年海外協力隊の一員としてウガンダの小学校に教師として派遣されていた妻美花さんと知り合うことに。

奇しくも、二人は夫婦としてまた同志として、アフリカの地で貧困に苦しむ家族や子どもたちのためにその思いを共有することとなる。

コロナ禍のため昨年の春に帰国。折しも信州の地元では雄一郎議員を中心に衆院選長野三区の候補者選びが焦点に。雄一郎議員の推薦もあり図らずも神津自身も候補のひとりとして渦中の人に。
そんな中での雄一郎議員の突然の死。神津にとってその非業は計り知れない衝撃だった。
雄一郎議員の死を惜しめば惜しむほど、自身のこれまでの活動と重なる子育てと子どもたちの未来に熱心に取り組んできた雄一郎の遺志を決して無駄にしてはならない。その志を受け継ぐことが自身に与えられた運命なのかもしれない。
神津には日に日にそんな思いが強く芽生えていった。

そして、己の人生を賭けた勇気ある決断。
人生の半分を、環境も・言語も・文化も・風習も・歴史も違う途上国の地での学びと、現地で刻み込んだ貴重な実体験を活かし、今度はふるさと信州のため、日本のために力の限り働きたい。

立憲民主党は常任幹事会において長野県連の推薦を全会一致で承認。
神津たけしは衆議院長野3区の総支部長に就任した。

妻と、8 歳と 5 歳の二人の子どもたちの決断も早かった。
妻も教員を辞し家族全員が上田市に移り住み、二人の子どもたちも父のためにと上田市の学校に転校した。
退路は断たれた。家族もまた父たけしとともに。ゆるぎない覚悟をもって。

「子どもの苦しみは親の苦しみ・苦しみから子どもたちを家族を救いたい」
「子どもたちの未来のために格差のない公正な社会の実現を」

次代のために、今この国の政治を変えたい。

神津（こうづ）たけし。44 歳。
次代を創る新しい力。

上田市在住　本籍 佐久市

どんどん広がる暮らしの格差

都会と地方、医療、教育、雇用、福祉 等々

本当に困っている人
声なき声に応えるのが
政治の大きな使命です

懸命に生きる
国民の声が届かない。
こんな政治はもういらない

国民の力で

この国の政治を変えよう

子どもたちの未来のために

神津（こうづ）たけし